



# 「ものまね力」を磨こう

●みなさんは新しい歌を覚えたいときにどのような方法を取りますか。

- ① 歌詞カードをずっと眺める。
- ② 歌詞カードを見ながらひたすらノートに書く。
- ③ 歌詞カードを見て自分なりに歌ってみる。
- ④ CDで曲を流し、歌詞カードを見ながら一緒に口真似する。

おそらく大抵の人が④番を選ぶと思います。①②は論外ですし、③だと音程やリズムがつかめません。(④で習熟した後なら③も有効だとは思いますが……。)もし①③の方法で必死に歌を覚えようとしている人を見かけたら、ついこう言ってしまうですよ。

「それって効率悪くない? CD聞いたほうが良いよ。」って。

- ところで中学生のみなさん。教科書英文の練習はどうやっていますか。
- ① 教科書をずっと眺める。
- ② 教科書を見ながらひたすらノートに書く。
- ③ 教科書を音読する。
- ④ CDで本文を流し、教科書を見ながら口真似する。

さて、どうでしょう。さすがに①に該当する人はいないと思いますが、②の該当者はまだまだ潜伏している気がします。



③自体は非常に効果的な練習ではあるのですが、④のステップを飛ばしてしまうと正しいリズム、音程、発音が身につきません。やはり理想は④から③の流れですね。④のステップでいかにCDの真似が出来るかが重要です。

●そもそも「学ぶ」ことは「真似る」ことです。

(「学ぶ」の語源は「真似る」だと言われています)我々日本人の母語は日本語です。みなさんも日本語を使いこなしていますよね。では、その日本語をどのようにして学びましたか。まさか生まれつき日本語を使いこなしている人なんていないですよ。生まれてすぐに「お母さん。産んでくれてありがとうございます。」なんて話した赤ちゃん。想像しただけで戦慄します。

●ではどのようにして日本語を身につけたのかというと、まさに真似なのです。周りの大人が使っている言葉を聞いて、真似をする。生まれた日から今日まで、私たちはインプットと真似を繰り返して多くのことを学び、身につけてきました。「真似」こそが「学ぶ」の源流なのです。

●そして、この「真似る力」、すなわち「ものまね力」は語学学習以外でも非常に重要な要素です。スポーツ、音楽、仕事。すべては真似て学ぶところから始まります。つまり、「ものまね力」を磨くことで、どの分野でも活躍できる地頭と基礎身体能力が培われます。そして、「ものまね力」の高さがその人の成長速度を決める大切な要素だと私は考えます。

●では、「ものまね力」をどのようにして磨いていけばいいのか。大切なのは「意識」と「継続」ではないでしょうか。「こういう部分を真似てみよう」という意識。そして、それをやり続ける継続力。この二つさえあれば必ず上達すると私は信じています。

は信じています。

●現在、創学舎の英語科では、中学生の「英文暗唱」と小学生の英語講座「レプトン」で、この「ものまね力」養成に取り組んでいます。特に「レプトン」では専用のCDを聴いて、真似をし、練習を繰り返すトレーニングをしています。レプトンの講座は開講して一年になりますが、声に出して練習を繰り返す人ほど成長速度の速さを感じます。そして、口真似を意識している人は同時に「ものまね力」も向上するため、成長速度が加速していく感覚もあります。彼らが今後どのように成長していくのか非常に楽しみです。この記事を読んでくれたあなた。今からでも遅くはありません。「ものまね力」を磨きましょう。

(高寺)

## 「正しき」よりも

### 大切なもの

●「Hug〜ん」

実家の玄関を開けるなり私に抱き着いてくる姪。その愛くるしさに、ただただデレデレしてしまう叔父の私。現在二歳半になる娘(私にとっては姪)の子育てに奮闘中の兄夫婦。その

兄夫婦が国際結婚のため、日本語も英語も分けて隔てなく使いこなしている(ように見える)姪は将来有望だな、なんて叔父バカになってしまいう私だが、会うたびに元気に明るく育っている姪を見てただで心が満たされる。兄夫婦を見て子育ての大変さを目の当たりにしながらも子どもの存在の尊さを毎度感じさせられていま

す。

●さて、その兄夫婦ですが、姪が生まれてまもないときは、(恥ずかしい話ですが)子育ての方針をめぐって姪の前でもよく夫婦喧嘩をしていたそうです。今年の正月に私が実家に帰ったときも、哺乳瓶をやめさせるべきかどうかで口論になりました。お互いが愛娘のことを思っている主張のぶつけ合いです。哺乳瓶を卒業させたい兄には兄の思う正しきがあり、哺乳瓶を卒業させるまでもう少し待ちたい奥さんには奥さんの思う正しきがある。それはどちらも我が子を思う愛情以外の何物でもありません。

●しかし、そんな両親の姿を見て、愛娘は喜ぶはずありません。大好きなパパとママがけんかをしている。こらえきれずに涙を浮かべ、そのときは哀しい顔で「Hug……」と私に抱き着いてきた姪。「娘のために」と思って、「娘のために」口論する。それが果たして本当に「娘のために」なっていたのであろうか。いつしか「自分のために」自分の正しさを主張するための口論になっていたのではないか。(兄夫婦の名誉のために補足しておきますが、最近ではあまり夫婦喧嘩をしなくなったそうです。兄夫婦も初めての子育てに手探り状態のようです。)

●それぞれの立ち位置で見える景色(正しき)は変わります。先述の哺乳瓶論争での、「自立」を促す父の視点と、保守的な母の視点では、見ている視点が違うため当然答えも違います。多面体のルービックキューブも見る角度が違えば見える色も変わります。自分の見ている色(正しき)と相手が見ている色(正しき)は全く違うことがあります。しかし、自分が見ているその色のみが正しいと思ひ込み、その色(正

# 楽しい手術

診察室の空気であったことは確かだ。医師も看護師も、明るく力強く情熱的で、一生懸命。暖かくて知性も感じる。小一



〜中三まで薬を飲み続けた患者経験豊かな私の眼にも優秀に映る。任せよう。

●「すみません。家にちよつと帰ってきたんですが？」「何分で戻れますか？」「タクシーを使って二十分。電話を二本入れて、少し荷物を持って……」「わかりました。今四時。四時二十分までに必ず戻ってきてください。いいですね。四時二十分ですよ。」用を済ませて、約束通り戻ると、サプライズがあった。私にとってはそれはまさにサプライズだった。今まで経験したことのない「うれしさ」を味わったのだ。診察室に顔を出すと、拍手拍手。「よかった！間に合った！」「よく戻りましたね！」何だ、これは？照れくさいじゃないか。みんな何故こんなに熱いのか？決めた！絶対任せよう。そして、手術室へ移動。そこにもサプライズが待っていた。ドアが開くと……。

●「ようこそ。一緒に頑張りましょう！」リーダーらしき医師の明るい声が響く。他のスタッフもみんな、うなずきながら笑顔。もう絶対任せるぞ。好きなようにしてください。なんか楽しい……。

●手術台に寝かされ、麻酔が始まった。横向きにされ、背中にほんのかすかな痛みが走る。徐々に胸から下の感覚がなくなっていく。気づくと女性の看護師が私の上半身を抱きしめている。「大丈夫ですよ。気分は悪くありませんか？」「大丈夫です。こうして抱かれて幸せな気分です。」手術室に笑いがおこる。

●「さあ、これから手術を始めます。すぐに終わります。」「がんばりましょう。」「今、メスを入れました。」「もう少し切りますね……。」「実況中継が始まった。」「ここまで順調です。」「あ、ありました。」「大きいですよ。立派な虫垂だ。」「破れてはいません。」「あ、少し癒着があるかな。でも大丈夫です。」「虫垂を切除します。」「順調にきています。」「今、半分ぐらい切りました。」「いやー、大きいな。こんなの久しぶりだな。」「よーし、きれいに取れたぞ。」「自分の肉体で起こっている出来事だが、読み聞かせの物語を聞いている気分だ。次はどうなるのだろう。」「小林さん、取れましたよ。見ますか？」「ええ、是非。」「こんなに大きいんですか？何も不思議な色ですね。赤に黄色にピンクに……。」「そうですね。大きいですよ。危ないところでしたよ。」「ありがとうございます。」「さわつてもいいですか？」「いや、それはダメです。」「これから縫合に入ります。」「こんなやり取りの中で、無事終了した。●それから数日の入院を経て現世に戻るのだが、その入院生活もそれなりに楽しかった。よき思い出である。また、後から聞いた話では、山登りの途中悪天候の中で虫垂が破裂して腹膜炎になり、手当が遅れて、胃の半分まで切除した人がいることを知り、自分も山登りをするので怖くなった。いやいや、あの医者たちは恩人である。感謝感謝

(小林)

### ▼▲継続希望の方へ▲▼

- ▶退塾や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送りいたします。
- ▶在籍していた教室までご連絡ください。

●三年前の三月十一日二時頃。右下腹部に鈍い痛みを感じて、かかりつけの病院に行った。腎臓に小さな石があり、それが降りてくる尿管結石というものを抱えていて。「例のやつだ。痛み止めでももらってくるか。」と出向いたのだった。一時間ほど待たされた後、診察があり、CTの撮影へと進んだ。これで三回目。体が白いトンネルのような筒の中をくぐるのだが、そのたびに何とも不思議な気分になる。結果が出て、診察室に呼ばれた。午後四時前になっていた。

●「小林さん。大変です。盲腸です。すぐ手術しないといけません。」「え！尿管結石じゃないんですか？」「ちがいます。盲腸です。かなり大きい。」「あの……。散らすとできませんか？」「無理です。破裂寸前です。いいですか。破裂したら腹膜炎になり、下手すると腸を半分切除することにもなるんですよ。」「……。」「(受話器を手に取って)こちら外科だ。虫垂炎の緊急手術だ！すぐに準備してくれ。今、四時前だ。何時に始められる？四時三十分ね。分った。よろしく頼む。」

●その後、手術の説明、書類の記入など猛スピードで進む。面倒なことになった。でも、この流れには抵抗できないな。仕方ない。そんなことを考えながら、手続きを済ませる。生来の臆病者だが、怖くはなかった。自分の意志と関係のないところでコトが進んでいく。そのことが、不快ではないのだけど、ある種の違和感を感じさせた。そしてこの程度の感情でいられたのは、

しさを主張すると、お互い自分が見ている色(正しさ)のみを主張するばかりに、不満や争いが起こることがあります。反対に、「相手が見ている景色(正しさ)を想像する力」＝「思いやり」で、相手が見ているのは何色なのだろう？今何を感じているのだろうか？と相手に思いを馳せるとどうなるであろうか。もちろん、人として間違ったことをしているときは、無条件で「正しさ」を主張する(伝える)必要がある場面もあるでしょう。しかし、大切な人と幸せな関係を築くためには「思いやり」を優先すべき場面があるのも確かではないでしょうか。

●『「正しさ」よりも、『善さ』を追及した方がよい。』そう尊敬する上司から言われたことがあります。(創学舎の社名の「アガトス」は、ギリシヤ語で「善さ」を意味します。)子育てには正解がないのかもしれませんが、同じく私たちが関わる教育にも絶対的な正しさなんてないのかもしれませんが。だからこそ「善さ」を追い求める必要がある。子どもが本当の意味で笑顔になるためにはどうすればよいのか。本当の意味で幸せになれるためには何が必要なのか。

●屈託なく笑う姪の笑顔。勉強にやりがいを感じられたときに見せる生徒の満ちた顔。子どもたちの顔が笑顔で溢れているとき、その国の未来も明るい子どもたちの笑顔のために、日本の未来のために、今の私に何ができるのであろうか。教育で絶対的に正しい答えは見つけられないのかもしれないが、子どもたちの笑顔が私たち大人の原動力になっていることは間違いのない。



(櫻村)